

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第七十六弾

神社本庁再生への道—その三十九

鶴岡八幡宮は、田中一打田一派が壟断する神社本庁との訣別を決断—全国の神道青年は、いまだどう行動すべきか、真剣に思いをめぐらせよ

藤原登(フリーライター)

自民党と神社本庁が、凋落してゆく。何も驚くことはない。自浄できない組織の、当然の帰結である。それでも、双方の執行部は延命の為、様々な策を弄することだろう。しかし、もがけばもがくほどに奈落への歩度が速まる姿が、私の目にはハッキリと見える。

自民党はこの期に及んで、誰がどう見ても裏金の「主犯」にしか見えない森元総理を表にださず、野党の追求からかわすことに必死である。それは確かに成功しているが、それで支持率があがることはあり得ない。野党に急所を握られたまま超低空飛行が続く。総選挙での大敗は必至である。森元総理が本場に「日本は神の国」と思っているのなら、自民党の将来のためにも神の国の総理経験者として、

潔く国会の場で真実を語るべきである。 対する神社本庁の田中「なほ在任」総長は、総長の選任をめぐる、鷹司総理が総長に指名した芦原理事が提訴した地位確認の裁判で、一審、二審は勝訴したものの、最終決着となる最高裁の判断がまだに出ないことに、不安をつのらせているという。それもそのはず、一審、二審で勝訴した神社本庁の代理人である小川尚史弁護士は昨年、「遅くとも年末迄には最高裁の決定ができる」と事あるごとに吹聴していたものの、年が明け桜の季節を迎えても、いまだに最高裁からの朗報は届かないからである。

宮が神社本庁からの離脱を決意した。神社側は離脱の理由を明らかにしていないが、鶴岡八幡宮の吉田宮司は、神社本庁の常務理事であった時から田中氏に對して、疑惑の発火点である職舎売却や、それに伴う裁判の対応について、総長としての責任を問う立場から、田中氏と対峙してきた人物である。 ならば吉田宮司に心の迷いは無いであろう。神道界の正常化を願うての神社本庁離脱の決断が、田中一打田体制下にある生気を削がれた神社関係者を覚醒させ、体制変革への起爆剤となることを心から願うものである。

これからの日本と世界

世界は今混乱の最中にある。ウクライナで戦争が始まってから二年以上が過ぎた。日本は開戦直後より、アメリカを中心とするNATO諸国と共同歩調をとり、ロシアに経済制裁を課すとともに、ウクライナを全面的に支援してきた。ただ、その判断の前提として、ここまで戦争が長引くことは全く想定していなかったと思われる。

また、イスラエルが侵攻したパレスチナ・ガザ地区の現状は、とても現代の文明社会で起きていることとは思えない。常任理事国の利害が絡んだ国際紛争に、国連が全くの無力であることを、あらためて示すことになった。

ウクライナでの戦争が始まったとき、筆者は本紙に、「春秋に義戦無し」と書いて、戦争当事者に対する覚悟なき支援をたしなめたつもりであった。しかし、ロシア軍の侵攻から二年が経過した今、筆者自身も考え方が中途半端であったと深く反省している。その理由は結果的に、

日本の対応が戦争の長期化、泥沼化に寄与してしまっていると考えざるを得ない。

日本は、戦争や国際紛争の解決に向けた努力を惜しまない国であって欲しいと思う。しかし、現在の日本は、世界平和のための崇高な理想を憲法前文に掲げてはいても、残念ながら魂の抜けた空文であって、その実現のために自ら練り上げた行動指針も、戦略も存在していない。

原爆投下や都市空襲によって数十万人の民間人が惨殺された経験は、戦後体制の枠組みの中で、いつの間にか自虐的フィクターを通して理解されるようになってきた。広島原爆慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい。過ちはくりかえしませぬから」との碑文の主旨は、慰霊のあり方を巡って論争的になつてきたが、言語空間すら日米安保体制に囚われ、自立心を失った国家の現状は、平和の問題を真剣に考える機会すら、日本人が自ら放棄しているように思えてならない。

今、日本人に必用なことは、自ら考え、行動することだ。それなくして、国際社会における

名誉ある地位など、おこがましうではあるが、智識を世界に求めなければならぬと思う。

神道青年は自ら考え行動せよ

この日本の現状は、田中一打田体制下にある今の神社本庁にそのまま当てはまる。理不尽なことがまかり通ったとしても、自ら思考し行動することなく、唯々諸々と体制の中に安住してれば、それなりの地位や身分が与えられてきた。しかし、その結果として、神道界全体に対する社会的な評価や期待感は、随分と低下してしまつたことに気づくべきである。

田中氏が神社本庁の副総長の地位に就いたのは、平成十六年のことである。これを基点とすれば、田中体制は二十年に及ぶ。近々に田中執行部が崩壊したとしても、二十年の間、自律的に考え行動するという、基本的な機能が麻痺したままであった組織が再生するには、それなりに行動する秋である。

今、神社本庁は危機的状況にあるが、その危機感が神道界全体に広がる時、逆に変革、再生への好機となる。それを担い得るのは、青年諸君をおいてほかにない。 全国の神道青年が智識を世界に求めるとともに、神道界の歴史と現状を深く学び、自ら考え行動する秋である。

藤原登(ふじわらのぼる)

昭和二八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。